

第76回 建築の原点は飛鳥時代？

I T 生

聖徳太子の没後1400年の取材で、宮大工の会社に話を聞いた。

大工の発祥は、はじめての官寺「四天王寺」の建設にあたり、朝鮮半島から大工を招へいたことだという。

日々反省するにつけ、われわれの目標は飛鳥時代ですな、という。



大工の神様として曲尺をもった太子像が祭られている四天王寺の番匠堂。手前の旗の「南無阿弥陀仏」の文字は大工道具の絵を組み合わせせて書かれている

宮大工で知られる西岡常一さんは著書「木に学べ」でつぎのように書いている。

—いまだに法隆寺の釘は1300年前のまま状態で使える。日本刀のように幾重にも何回も折り返して釘にしている。釘を顕微鏡で見ると何千枚と層になっていて、外側はさびていても中の強度は変わらない。瓦も低温で長時間焼いて、天日乾燥だから、昔の瓦は強い—

もともと、現代は大量生産時代だから、飛鳥時代の工法に習っていたのでは、間に合わないということはあるにせよ、昔からの物事の成り立ち（生活の知恵）を良く知り、そのうえで、現代社会・生活の弱点を補う方法を考えることは必要だろう。

いまはやりの「持続可能な社会づくり」ということになるが、西岡さんは、そもそも未熟な技術つまり使い捨ての技術はリサイクルができないから非効率だという。速習の未熟な技術は、人材も育てない。環境は悪化する、人間はあほになるわ、これを地球の終わりといわずして、なんという、というところだろう。

それに比べて、聖徳太子は1400年も前に、「持続可能な社会づくり」に答えをだしているのだから、1万円札の顔になるだけの価値はあるわけである。

（令和3年11月）